ト教が何か正解を出したわけではないのですが、絶望における希望を考える上で参照に値するものの一つであると見ています。その辺りを問題提起としてお聞き下さい。

＜資料＞の４３頁にロラン・バルトの『ラシーヌ論』を引いておきました。これを読みますと、昨今の生死の議論がラシーヌ悲劇の性格を持っていることがわかります。これは今の場合、誉め言葉ではありません。ロラン・バルトは、悲劇を批判して、＜資料＞の４６頁に見られるように、「ラシーヌ悲劇の活用形に欠けている人称が一つだけある。「我々は(nous)」である」と書いているからです。簡単に済ませますが、９６％の人は悲劇を演じているのに対し、４％の人は悲劇の空間の外で別の問題に取り組んでいるのです。

次に＜資料＞の４７頁に進みます。クロード・ベルナールは毒物のクラーレに関心を持っていて、最初の実験を1844年に行なったと報告しています。そしてクラーレの作用をこう記述しています。＜資料＞の４８頁です。「筋肉を収縮せしめる神経要素の死が生物全体の死をもたらし」とです。そしてベルナールは、これは古今の詩人が最も恐ろしい苦しみと想像していた状態にほかならないと述べてもいます。

その上で＜資料＞の４８頁からのキルケゴール『死に至る病』を見ていきます。これは1849年に書かれています。また、キルケゴール自身は、一次感染か母子感染かは定かでありませんが梅毒に罹っていて進行性麻痺で死亡したようです。彼自身の兄弟姉妹も進行性麻痺で早死にしたようです。このことを念頭に置いて下さい。

先ず「絶望」は「病」であると宣言されます。文字通りに病気のことだと読むべきであると考えて読んでいきます。では、どんな絶望的病気なのでしょうか。

「この世的な苦悩」のことではありません。＜資料＞４９頁に書かれているように、「困窮・病気・悲惨・艱難・災厄・苦痛・煩悶・悲哀・痛恨」のことではありません。普通の意味での「致命的な病」のことでもありません。

＜資料＞４９頁から５０頁にはこう書かれています。「この病では人は断じて死ぬことはない」のだが、「死ぬことができないというまさにそのこと」が「絶望の苦悩」になっている状態のことである、「死にうるという希望さえも失われている」状態のことである、とです。

つまり、19世紀半ばにおいては、おそらく、クラーレの毒性や進行性麻痺の病状からも出発して、絶望的状態としての病が想像されていたのです。このことはおそらく歴史的にも、神経系の生物学や医学の成立と連動していたはずです。

さて、常にそうですし、仕方のないことですが、そこから先へ踏み出すキルケゴールの議論は混乱しています。強調したいのは、混乱して当然だし、混乱すべきだということです。幾つか拾って指摘していきます。

第一に、絶望的状態に対する治療は、可能性という名の希望であることが確認されます。ところで、この世では、死にうる可能性も無くなっていて、可能性は零と想定されていますから、この世にない可能性を希望として信仰するという理屈になります。＜資料＞５０頁の下を見て下さい。キルケゴールはこう書いています。

「誰かが気絶した場合には、我々は水やオードコロンやホフマン氏液を持ってくるように叫ぶ。だが誰かが絶望せんとしている場合には、「可能性を創れ！　可能性を創れ！」と我々は叫ぶであろう。可能性が唯一の救済者なのである。可能性！　それによって絶望者は息を吹き返し、蘇生する。可能性なしには人間はいわば呼吸することができないのである。時には人間の想像の発明力だけで可能性が創り出されることもありうる、――だが結局は、神にとっては一切が可能であるということのみが救いとなるのである。すなわち結局は信仰が問題なのである。」(62)

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）
分担研究報告書

神は全能であるから、死後の復活の可能性を希望とするわけですが、もちろんそれで片が付くわけではありません。まともな宗教者ならそれで済ましはしません。神に対する信仰が、今この世での絶望的状態に何かをもたらすということ、あるいは、今この世での絶望的状態の只中に信仰への導きがあるということを説得し納得したいと思うからです。信仰を信念にしたいからです。

ところが、第二に、キルケゴールは、そうしたいはずなのに、やはりそこに成功はしていません。＜資料＞５０頁の辺りでは、絶望を分析して自己の中に永遠なるもの（世俗化すれば「永遠の命」「ゲノム30億年」「大河の一滴」などです）が存すると論証したがっていますが成功していません。また、＜資料＞５１頁では、自殺はできない前提で始めたはずですが、ともかく自殺は「罪の絶頂」であるとしていますが、これも議論抜きで断言されるだけです。しかも混乱があるのに回避しています。絶望状態には自殺できる可能性すらないとされていたはずです。にもかかわらず、自殺の可能性があるかのように想定して、それが禁じられると語るのです。また、絶望状態に残されたとされる自殺の可能性は、全能の神にはないのだろうかという伝統的な問題もあります。

それでも、第三に、これもキルケゴールは成功していないのですが（しかし何をもって成功と言うべきなのでしょうか）、ユダヤ教-キリスト教の極めて重要な伝統の一つ（たぶん他の宗教にも見出すことができると思いますが）、信仰と呼吸の類比を提出します。＜資料＞の５０頁から５１頁にかけてです。ならば、絶望的状態にあって、呼吸の可能性を創ることこそが、神の救いに匹敵するはずです。しかし、キルケゴールはそうは言いませんし、その類比を考え抜くことをしません。人間の発明力の可能性が当時はなかったからでしょうが、そこは措くとして、事柄からして、人間の発明力だけが救いになるわけではない事態を見据えるからでしょう。

そして、最後に、キルケゴールは、絶望が悪魔的なもの（デモーニッシュなもの）になると言きます。＜資料＞の５１頁から５２頁です。今は読み上げませんが、私の見るところ、たぶん通常の理解には反するでしょうが、キルケゴールは、この悪魔的な絶望を否定しているのではありません。絶望的状態で生き延びること、絶望的状態に固執して生き残ること、これは通常のキリスト教徒からするなら（９６％の目から見るなら）悪魔的な所業であるにしても、まさにそれ故に、神に対する反抗者として、というより、神の失策の証人として生きることであるから、その限りで神の全能への信仰を試す意味があるのだと言いたいのです。世俗化して言い直してみて下さい。「神」を世俗化して、「家族」「政治・経済・社会」と言い直してみて下さい。キルケゴールが己の進行性麻痺に絶望しながら、彼は路上で倒れて死んだと伝えられていますが、４％の立場からするなら、キルケゴールはその絶望的状態を悪魔的に死ぬまで生き抜いたと見ることもできます。

錯綜し混乱した話になりました。＜資料＞５２頁からはアウエルバッハとドゥルーズのものも引きましが、これも読んで考えるなら錯綜し混乱した話になります。

簡単に素朴にまとめて終えます。言いたいことは簡単です。どんなことについてであれ物を考え始めたらわからなくなるということです。生死をめぐって知識人や研究者があれこれ言いますが、よく恥ずかしくもなく、西洋の伝統ではとか、日本の伝統ではと口にできるものだと思います。しかもそんな一知半解の連中が、人間の生死を決めている。まったく許し難いと思います。

最後に一例をあげます。「死に匹敵する苦痛」「死より辛い苦痛」などと語られることがあります。そう言いたくなる場合があるだろうとは思います。ところが、ある種の人びとはこんな議論を拵えます。

第一に、苦痛が増すほど、鎮静のドラッグの量は増える。第二に、ドラッグの量が増えるほど、余命期間は短くなる。この二つを公理のように立てます。苦痛の強さ、ドラッグの量、余命期間の短縮度の三つが単純に比例すると想定するわけです。

その上で、先ずこう進められます。苦痛が非常に増してドラッグの量が非常に増えるなら余命期間は零にな

るだろう、とです。ここには沢山の嘘があります。苦痛の強さとドラッグの量には最大値や上界があるはずですから、三つのものの比例関係は破綻するはずですが、そこは無視されて、次にこう進められます。苦痛が非常に増すと「死んだほうが増し」状態になるから、ドラッグを使って余命期間零にしてもいいだろう、とです。ここにも沢山の誤魔化しがあります。鎮痛と殺害に使用するドラッグは同じではありません。余命期間零になることと、殺すことや死なすことは同じではありません。そこで、補足の理屈が次々と加えられます。加えられることで議論が不透明にされて、あたかも難しい問題であるかのように見せかけられます。その過程で、出発点の二つの公理のようなものはそのままにされますから、何だかんだ言っても苦しみを癒すには余命期間零化しかない、と思わせることになるし、議論する当人もそう思い込むわけです。

この程度の屁理屈で人間の生死が左右されているわけです。屁理屈に対して応戦してもせいぜい理屈にしかなりませんので、率直に言って私はやる気になりません。しかし、世間に向かって何かを言って行動するには方便を弄さなければなりません。状況・分野・相手に応じて戦術を変えざるをえないし理屈を捏ねなければならないのも確かです。しかし、再びしかしですが、生死に関して抗弁・理屈を捏ねざるをえないというまさに受動的な状況こそ無くさなければなりません。

そして、病人自身がまさに可能な間は可能な範囲で可能な限り能動的主体的に行なえるような、心置きなく生き延びられるような、そんな改革を展望することが、絶望的状態になってはいない者たちに課せられた責務であると思います。

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

平成18年度 研究成果の刊行に関する一覧表

〔書籍〕

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
中島孝	神経内科のすべて	阿部康二編集、中島孝	神経難病のQOL評価から緩和ケアについて	新興医学社	東京	2006年(印刷中)	
中島孝	第三章心理ケア	日本ALS協会編集	新ALS(筋萎縮性側索硬化症)ケアブック	川島書店	東京	2005年12月	25－39
稲葉一人	終末期医療の法と判例	高橋隆雄、浅井篤	日本の生命倫理:回顧と展望	九州大学出版社		2007(印刷中)	
今井尚志	(神経)難病医療ネットワークと特殊疾患療養病棟	日本ALS協会	新ALSケアブック	川島書店	東京	2005	157
今井尚志	身体障害者療護施設	日本ALS協会	新ALSケアブック	川島書店	東京	2005	158
今井尚志	神経難病の病名の告知	平山惠造監修. 廣瀬源二郎、田代邦雄、葛原茂樹 編集	改訂5版 臨床神経内科学	南山堂	東京	2005	821-823
荻野美恵子	在宅神経難病の問題点—勤務医の立場から—	阿部康二	神経難病のすべて	新興医学出版社	東京	2007(in press)	
荻野美恵子	Fisher症候群の治療はGuillain-Barre症候群とはどう違うか	岡本幸一、棚橋紀夫、水澤英洋	EBM神経疾患の治療	中外医社	東京	2007	341-344
荻野美恵子	頭痛	山口徹、北原光夫、福井次矢	今日の治療指針2007年版	医学書院	東京	2006	669-671
久野貞子	第2章 病因・病理と病態生理 運動症状	新しい診断と治療のABC 39 神経4 パーキンソン病	水野美邦	最新医学社	大阪	2006	50-55
久野貞子	第3章、発病と進行、2.パーキンソン病患者の死亡原因	パーキンソン病 臨床の諸問題	山本光利	中外医学社	東京	2006	54-58
熊本俊秀	サルコイドーシスの臓器病変:神経・筋肉	安藤正幸、四元秀毅監修	サルコイドーシスとその他の肉芽腫性疾患	克誠堂出版	東京	2006	80-87
黒岩義之	嗅覚障害の診かた	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	60-62
黒岩義之	視覚障害の診かた	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	63-71
岸田日帯	感覚	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	434
岸田日帯	感覚異常	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	434
岸田日帯	感覚系伝導路	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	435
岸田日帯	感覚検査	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	436
岸田日帯	感覚神経	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	436
岸田日帯	感覚領	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	437
岸田日帯	サドル型感覚	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	944
岸田日帯	知覚	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	1618
岸田日帯	痛覚異常	相川直樹他	医学大辞典	南山堂	東京	2006	1676

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔書籍〕

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
児矢野繁	合併症，脳血管障害	日本糖尿病学会	糖尿病専門医研修ガイドブック改訂3版	診断と治療社	東京	2006	222-225
後藤清恵	第3章　心理的ケア	日本ALS協会	新ALSケアブック	川島書店	東京	2005	40-50
西澤正豊	神経難病と災害対策	阿部康二	神経難病のすべて	新興医学出版	東京	2007(印刷中)	
西澤正豊	脊髄小脳変性症の概論　研究と情報		脊髄小脳変性症のすべて	日本プランニングセンター		2006	19-22
西澤正豊	抗アセチルコリン受容体抗体	河合忠編	基準値と異常値の間ーその判定と対策ー改訂6版			2006	252-254
福永秀敏	慢性神経疾患の医療	広瀬・田代・葛原	臨床神経内科学	南山堂	東京	2006	813-821
水島　洋	癌における遺伝子異常と個人化医療	山本重夫監修	バイオ解析・診断技術のテーラーメイド医療への応用	シーエムシー出版	日本	2006	145-155
水島　洋	日米の治験の比較(ゲノム治験推進)	町淳二監修	国民医療への道	日本医療企画	日本	2006	
宮坂道夫	医療倫理の方法としての物語論	江口重幸，斉藤清二，野村直樹編	『ナラティヴと医療』	金剛出版	東京	2006年	p.82-92
山内豊明	5章 循環器系 体のすみずみまで血液を送るしくみ	編集/林正健二	イメージできる解剖生理学	メディカ出版	大阪府	2006年4月1日	58-69
山内豊明			ベイツ診察法ポケットガイド第2版 Pocket Guide to Physical Examination and History Taking Fourth Edition(訳書)	メディカルサイエンスインターナショナル	東京都	2006年4月1日	1-374 (1冊)
著/サンドラ・スミス、ドナ・デュエル・バーバラ・マーティン 監訳/川原礼子・山内豊明・山田智惠里			看護技術目でみる事典	西村書店	東京都	2006年5月5日	1-639 (1冊)
著/ティルダ・シャロフ 訳/荒木文枝		監修/山内豊明	ICU看護師生と死がわかれる時	西村書店	東京都	2006年8月4日	1-417 (1冊)
山内豊明	第2章「看護必要度」を評価するための項目　Ⅰ.アセスメントにおける「看護必要度」の考え方	監修/岩澤和子・筒井孝子	看護必要度第2版 看護サービスの新たな評価基準	日本看護協会出版会	東京都	2006年8月31日	21-35

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔書籍〕

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
山内豊明・筒井孝子・看護必要度アセスメント項目評価基準検討委員会(植原美恵・髙田穂積・吉田秀美・井出志賀子・宇津木もと子・関矢カズ子・坪井ちえみ・外谷憲子・飯田琴枝・熊谷富子・畠中智代・岸川惠子・白石和子・鈴木厚子・米山万里枝・安藤恵美子・野尻恵子・野出典子・古瀬敬子・梅野直美・小川圭子・斉藤恭子・渡辺美奈)	第2章「看護必要度」を評価するための項目　Ⅱ.「看護必要度」のチェック項目と記入の手引き	監修/岩澤和子・筒井孝子	看護必要度第2版 看護サービスの新たな評価基準	日本看護協会出版会	東京都	2006年8月31日	36-77
山内豊明・筒井孝子・看護必要度アセスメント項目評価基準検討委員会(植原美恵・髙田穂積・吉田秀美・井出志賀子・宇津木もと子・関矢カズ子・坪井ちえみ・外谷憲子・飯田琴枝・熊谷富子・畠中智代・岸川惠子・白石和子・鈴木厚子・米山万里枝・安藤恵美子・野尻恵子・野出典子・古瀬敬子・梅野直美・小川圭子・斉藤恭子・渡辺美奈)	第2章「看護必要度」を評価するための項目　Ⅲ.例題	監修/岩澤和子・筒井孝子	看護必要度第2版 看護サービスの新たな評価基準	日本看護協会出版会	東京都	2006年8月31日	78-96
山内豊明	第4章 看護管理における「看護必要度」の活用 Ⅱ.「重症度・看護必要度に係わる評価票」の評価項目とその評価	監修/岩澤和子・筒井孝子	看護必要度第2版 看護サービスの新たな評価基準	日本看護協会出版会	東京都	2006年8月31日	172-186
山内豊明	なぜアセスメント技法が必要か,また活用方法は	編集/川上千英子	フォーカスチャーティング・記録による看護の質評価	メディカ出版	大阪府	2006年9月10日	6月15日

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔書籍〕

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
監訳/山内豊明	監訳者前書き	編集/Lawrence M.Tierney, Jr.,Mark C.Henderson	聞く技術 答えは患者の中にある(上) THE PATIENT HISITORY: Evidence-Based Approach	日経BP社	東京都	2006年9月11日	iv
監訳/山内豊明	監訳者前書き	編集/Lawrence M.Tierney, Jr.,Mark C.Henderson	聞く技術 答えは患者の中にある(下) THE PATIENT HISITORY: Evidence-Based Approach	日経BP社	東京都	2006年9月11日	iv
山内豊明	第2章全身のみかた Ⅰ視診	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	16-19
山内豊明	第2章全身のみかた Ⅱ触診	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	20-22
山内豊明	第2章全身のみかた Ⅲ打診	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	23-24
山内豊明	第2章全身のみかた Ⅳ聴診	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	25-26
山内豊明	第2章全身のみかた Ⅴバイタルサインのみかた	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	27-35
山内豊明	第6章神経系のみかた Ⅰ神経系のアセスメントを進めていく上での基本方針	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	138
山内豊明	第6章神経系のみかた Ⅱ神経系の系統的アセスメント	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	139-175
山内豊明	第8章高齢者のみかた Ⅰ加齢による変化	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	212-214

平成18年度 研究成果の刊行に関する一覧表

〔書籍〕

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
山内豊明	第8章高齢者のみかた Ⅱ病歴聴取のための問診のポイント	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	215-222
山内豊明	第8章高齢者のみかた Ⅲ機能評価	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	223-226
山内豊明	第8章高齢者のみかた Ⅳ身体各系統のみかた	編集/日野原重明	フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術 第4版	医学書院	東京都	2006年12月1日	227-241
Momoe Konagaya,Yumiko Kawaguchi,Sawako Kawamura	IDENTIFYING CARE ELEMENTS FOR PALS PROVIDED BY PERSONAL ASSISTANTS, International Symposium on ALS/MND in YOKOHAMA,		Amyotrophic Lateral Sclerosis," [abstract] The 17th International, Symposium on ALS/MND, VOl7	Amyotrophic Lateral Sclerosis, " [abstract] The 18th International	London	2006	79
川口有美子	「障害者自立支援法をめぐるコンフリクト」		訪問看護と介護	医学書院	東京	2006	Vol11-5:504-
川口有美子	「医療的ケアの拡大と近未来の在宅医療」		福祉労働111	現代書館	東京	2006	20-27
川口有美子	「ALSヘルパー養成講座「進化する介護」専門職と非専門職の協同作業のために」		訪問看護と介護	医学書院	東京	2006	Vol.11-7:694-695
川口有美子	「在宅ケアをデザインする—2 政治に訴えるさまざまな方法」		訪問看護と介護	医学書院	東京	2007	Vol.12-1:46-47

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
中島孝、川上英孝、伊藤博明	ALSへのNPPVの導入	Journal of Clinical Rehabilitation	Vol.16No.3	243-250	2007
中島孝	QOL評価の新しい挑戦　療養者の物語によるSEIQoL-DWの試み	日本難病看護学会誌	11巻3号	181-191	2007
伊藤博明、中島孝	在宅神経難病患者のQOL	神経内科	65(6)	542-548	2006
坂井健二、中島孝、福原信義	抗凝固治療開始後にmicoroembolic signalの一過性増加をみとめた原発性抗リン脂質抗体症候群の一例	脳と神経	58(5)	439-42	2006
中島孝、伊藤博明	ライソゾーム病治療に真の夜明けが訪れた	難病と在宅ケア	12(8)	37-38	2006
樋口真也、中島孝	ALS患者さんの呼吸療法の誤解を解くために	難病と在宅ケア	12(7)	7-11	2006
中島孝	QOL向上とは、難病のQOL評価と緩和ケア	脳と神経	58(8)	661-669	2006
中島孝	ALSにおける呼吸療法–総論	神経内科	64(4)	330-386	2006
Nakajima T	Individual ALS care in the Japanese 'nanbyo'care model: comparison with palliative care approaches in achieving best quality of life	Amyotrophic Lateral Sclerosis	(Suppl 1)7	45–47	2006
坂井健二、中島孝、福原信義	ミオクローヌスと運動失調を主症状としナイアシン投与が有効であったアルコール性ペラグラ脳症が疑われた1例	脳と神経	58(2)	141-144	2006
本田由香利、福井真理子、岩尾祐里、姫野深雪、中浦豪太、秋山智	ALS患者にとってのホームページ開設の意義とその特徴	日本難病看護学会誌	10巻1号	44	2005
吉田哲、中村政子、秋山智	身体障害者療護施設におけるALS入所者のケア	日本難病看護学会誌	10巻1号	57	2005
橋本明実、渡辺重子、田代明子、松本妙子、神城佳誉子、友瀬仁美、秋山智	筋萎縮性側索硬化症患者の在宅療養に向けた退院計画の検討	日本難病看護学会誌	10巻1号	74	2005
姫野深雪、秋山智、中浦豪太、岩原孝子、友瀬仁美	Rett症候群患児の親の障害受容過程における思いの特徴	日本難病看護学会誌	10巻2号	106-116	2005
秋山　智	ある若年性パーキンソン病療養者の職業経験に関する研究	日本難病看護学会誌	11巻1号	58	2006
秋山　智	パーキンソン病友の会福岡県支部若年部会の試み	日本難病看護学会誌	11巻1号	60	2006
伊藤博明	事前指示書のあり方	難病と在宅ケア	12(2)	47	2006
伊藤博明	パーキンソン病講座:くすりと療養上の注意	難病と在宅ケア	12(4)	45-48	2006
伊藤博明、中島孝	特定疾患のライソゾーム病治療に真の夜明けが訪れた	難病と在宅ケア	12(8)	37-38	2006
伊藤博明、中島孝	在宅神経難病患者のQOL	神経内科	65(6)	542-548	2006
伊藤道哉、濃沼信夫	終末期における医療供給体制の課題	保健医療科学	Vol.55　No.3	225-229	2006
今井尚志、大隅悦子、志澤聡一郎、木村　格	人工呼吸療法の告知	神経内科	vol.65 №6	65(6):556-559	2006
木村格、今井尚志、久永欣哉、菊地昭夫、松本有史	特集"神経内科の医療・介護 —現状と課題— 神経難病地域医療ネットワーク	神経内科	vol.65 №6	65(6):549-555	2006
IMAI T, TSUBAI F, SHIZAWA S, KUEIHAEA K, OAUMI E, MATSUO M	COMMUNICATION METHODS FOR ALS PATIENTS USING A TELEVISED MOBILE PHONE SYSTEM	Amyotrophic Lateral Sclerosis	Vol.7	Supplement, p76	2006
Takahashi T, Aoki M, Imai T, Yoshioka M, Konnno H, Higano S, Onodera Y, Saito H, Kimura I, Itoyama Y	A case of dysferlinopathy presenting choreic movement.	Mov Disord	21	1513-1515	2006

平成18年度 研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
鳩飼英嗣、臼井邦人、栗本育三郎、今井尚志	在宅・遠隔医療のためのテレイグジスタンスシステムI-PETの設計と試作 —ネットワーク対応対面ディスプレイ系と障害者対応入力系—	Journal of The Japan Society for Welfare Engineering	8巻1号	23-28	2006
田中祐介、栗本育三郎、土屋勇治、今井尚志	神経難病のための低価格USBカメラを用いたネットワーク対応意思伝達装置の開発	Journal of The Japan Society for Welfare Engineering	7巻2号	23-28	2005
今井尚志、大隅悦子	ALS患者のスピリチュアルケアー専門医の立場からの一考察—	緩和ケア	15(5)	422-425	2005
今井尚志	ALSの正しい理解と予後を見据えての自己決定～TV放映のその後～	難病と在宅ケア	vol.10 №11	9-12	2005
今井尚志ほか	人工呼吸器装着ALS患者さんの療養先拡大に向けて	難病と在宅ケア	9(10)	24-26	2004
今井尚志、大隅悦子	神経難病(特にALS)の緩和ケア 1. 神経難病、特に筋萎縮性側索硬化症(ALS)とは	非悪性疾患の緩和ケア ターミナルケア11月増刊号	第14巻11月増刊号	98-102	2004
今井尚志、大隅悦子	神経難病(特にALS)の緩和ケア 2. 神経難病、特に筋萎縮性側索硬化症(ALS)と告知	非悪性疾患の緩和ケア ターミナルケア11月増刊号	第14巻11月増刊号	103-105	2004
松下祥子,小西かおる,小倉朗子,牛込三和子,川村佐和子	神経系難病における地域支援体制に関する評価	民族衛生	72(2)	47-58	2006
矢島正栄,川尻洋美,友松幸子,依田裕子,牛込三和子	看護職が行う難病相談支援事業における疾患群別相談内容の分析	日本難病看護学会誌	10(3)	198-211	2006
新井明子,牛込三和子,飯田苗恵,佐々木馨子	在宅人工呼吸器装着ALS療養者の介護者休養目的短期入院の利用効果	日本難病看護学会誌	10(3)	224-230	2006
小西かおる,小倉朗子,川村佐和子,牛込三和子,近藤紀子	神経系難病における地域ケアシステムおよび療養環境の評価方法の構築に関する研究	日本難病看護学会誌	10(3)	231-243	2006
原田朋代,中迫貴美子,牛込三和子	M県重症難病患者入院施設確保事業における難病医療相談員の活動の分析	日本難病看護学会誌	11(1)	51	2006
小倉朗子,本田彰子,近藤紀子,乙坂佳代,重信好恵,会田久子,小川一枝,小西かおる,川村佐和子,牛込三和子	訪問看護における神経・筋難病看護の専門特化に関する検討	日本難病看護学会誌	11(1)	52	2006
福島昌子,小林直樹,羽鳥秋子,牛込三和子	筋萎縮性側索硬化症(ALS)療養者の各症状・障害時期における訪問看護の特性	日本難病看護学会誌	11(1)	53	2006
谷口亮一,若林研司,本田理,角田徹,小倉朗子,田中一枝,小森哲夫,石井昌子,長沢つるよ,中山優希,兼山綾子,板垣ゆみ,牛込三和子,川村佐和子	在宅神経難病療養者における「訪問指導事業(訪問診療)」の有用性に関する検討	日本難病看護学会誌	11(1)	55	2006
牛久保美津子,牛込三和子,佐々木馨子,飯田苗恵,羽鳥秋子,小林直樹	在宅難病看護の専門教育プログラムに関する検討	日本難病看護学会誌	11(1)	65	2006
川尻洋美,斉藤由美子,依田裕子,矢島正栄,牛込三和子	難病相談支援センターにおける患者会相談員との合同相談技術共有の実際	日本難病看護学会誌	11(1)	68	2006
牛久保結紀,高久順子,大谷忠広,牛込三和子	ALS療養者の訪問看護開始一年間の支援の分析	日本難病看護学会誌	11(1)	89	2006
大谷忠広,櫛谷節子,牛久保結紀,高久順子,牛込三和子	訪問看護ステーションのALS療養者支援における他職種との連携	日本難病看護学会誌	11(1)	90	2006
櫛谷節子,高久順子,大谷忠広,牛込三和子	在宅人工呼吸療法を選択したALS療養者の訪問看護における支援チームとの連携	日本難病看護学会誌	11(1)	91	2006

平成18年度 研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
Miki Onishi Akiyama, Mami Kayama, Soichi Takamura, Yuri Kawano, Sadayoshi Ohbu, Shunichi Fukuhara	A study of the burden of caring for patients with amyotrophic lateral sclerosis (MND) in Japan	British Journal of Neuroscience Nursing	2	38-43	2006
Yoshimi Suzukamo, Sadayoshi Ohbu, Tomoyoshi Kondo, Junko Kohmoto, Shunichi Fukuhara	Psychological adjustment has a greater effect on health-related quality of life than on severity of disease in Parkinson's disease	Mov Disord	21	761-766	2006
大生定義	リハにおけるアウトカム評価尺度 Norris Scale, ALSFRS-R, ALSAQ-40	Journal of Clinical rehabilitation	15	364-371	2006
荻野美恵子	ALS診療におけるNIPPVの長所と問題点	神経内科	Vol.64,No.4	402-406	2006
Mieko Ogino, Yutaka Ogino, Sachiko Irie, Naomi Kanazawa, Toyokazu Saito, Fumihiko Sakai	Long-term prognosis of Guillain-Barre syndrome	J Neuroimmunology	178 supple 1	222	2006
荻野美恵子、荻野裕、坂井文彦	ALSにおけるNIPPV在宅導入	日本在宅医学会雑誌	第8巻、第1号	109	2006
中西浩司、荻野美恵子、坂井文彦	「神経難病のコミュニケーション障害に対する援助手段」リストの作成	神経治療学	Vol.23,No.3	300	2006
荻野美恵子、荻野裕、坂井文彦	神経難病(特にALS)における事前指示書のあり方	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
今関亜由美、中西浩司、中丸紀久美、紅林希、竹内寛人、荻野美恵子、坂井文彦	ALS患者における上肢装具の現状と問題点	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
上出直人, 荻野美恵子、平賀よしみ、春日美保、藤橋紀行、安藤文子、山崎岳之、隅田祥子、宮城しほ、坂井文彦	ALSにおけるSNIPの有用性	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
小林美奈子、荻野美恵子、斉藤豊和	ALS患者における主観的QOLの比較	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
氏家幸子、荻野裕、荻野美恵子、織茂智之、坂井文彦	遺伝性パーキンソン病相模原家系(PARK8)の中枢神経病理所見と心臓交感神経の関係	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
飯ヶ谷美峰、荻野美恵子、由井進太郎、荻野裕、坂井文彦、的場元弘、大西秀樹	ALS終末期における緩和ケアについて	臨床神経学	Vol 46, No12		2006
Imazaki A, Ogino M, Ogino Y, kamide N, Asai N, Sakai F	The present status and problems eith upper extremity orthosis in patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis	ALS and motor neuron disorders	7(Suppl 1)	74-75	2006
Kamide N, Ogino M, Ogino Y, Fukuda M, Sumida S, Hiraga Y, Sakai F	Usefulness of Sniff Nasal Inspiratory Pressure (SNIP) for Japanese Patients with ALS	ALS and motor neuron disorders	7(Suppl 1)	83	2006
荻野美恵子	侵襲的人工呼吸療法を選択しないALS患者さんの緩和ケア	難病と在宅ケア	Vol.12,No9	23-26	2006
Murakami T, Hayashi YK, Noguchi S, Ogawa M, Nonaka I, Tanabe Y, Ogino M, Takada F, Eriguchi M, Kotooka N, Campbell KP, Osawa M, Nishino I	Fukutin gene mutations cause dilated cardiomyopathy with minimal muscle weakness.	Ann Neurol.	Vol.60,No5	597-602	2006

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
Shimoda T, Koizumi W, Tanabe S, Higuchi K, Sasaki T, Nakayama N, Azuma M, Saigenji K, Katou T, Ogino M	Small-cell carcinoma of the esophagus associated with a paraneoplastic neurological syndrome: a case report documenting a complete response	Jpn J Clin Oncol	36	109-12	2006
荻野美恵子	多発筋炎・皮膚筋炎	Clinical Neuroscience	Vol.24 No.1	83-85	2006
牛久保美津子、小倉朗子、小西かおる	訪問看護師がとらえた神経難病療養者の苦悩・葛藤場面と心理的支援	日本難病看護学会誌	vol.9	188-193	2005
岡戸有子、小川一枝、川崎芳子、白木富幸、小倉朗子	ALS療養者における在宅療養継続の困難要因に関する検討	日本難病看護学会誌	vol.9	200-204	2005
松下祥子、小西かおる、小倉朗子、牛込三和子、川村佐和子	神経系難病における地域支援体制に関する評価	民族衛生	72	47-58	2006
大木幸子、吉田真理子、小川一枝、小倉朗子	介護保健時代において保健所に求められる難病療養者への療養支援機能	日本難病看護学会誌	vol.10	218-223	2006
小倉朗子、本田彰子、近藤紀子、乙坂佳代、重信好恵、会田久子、小川一枝、小西かおる、川村佐和子、牛込三和子	訪問看護における、神経・筋難病看護の専門特化に関する検討	日本難病看護学会誌	11	52	2006
谷口亮一、若林研司、本田理、角田徹、小倉朗子、田中一枝、小森哲夫、石井昌子、長沢つるよ、中山優季、兼山綾子、板垣ゆみ、牛込三和子、川村佐和子	在宅神経難病療養者における「訪問指導事業（訪問診療）」の有用性に関する検討	日本難病看護学会誌	11	55	2006
小西かおる、小倉朗子、川村佐和子、牛込三和子、近藤紀子	神経難病における、地域ケアシステムおよび療養環境の評価方法の構築に関する研究－地域ケアアセスメントの指標に関する検討－	日本難病看護学会誌	11	56	2006
大島真紀、松下祥子、村田加奈子、小倉朗子、中山優季	病院における筋萎縮性側索硬化症療養者と看護師のコミュニケーション手段の獲得とその取り組みに関する研究	日本難病看護学会誌	11	62	2006
村田加奈子、奥山典子、小倉朗子、松下祥子、中山優季、石井昌子、川村佐和子	在宅人工呼吸器使用難病患者の訪問看護利用に関する検討	日本難病看護学会誌	11	72	2006
中山優季、小倉朗子、村田加奈子、川村佐和子	ALS在宅人工呼吸療養者の外出を可能とする要因に関する検討	日本難病看護学会誌	11	85	2006
松下祥子、村田加奈子、木下正信、小倉朗子、中山優季、我孫子妙子、広瀬和彦、川村佐和子	在宅重症難病者の通院時の安全確保に関する研究	日本難病看護学会誌	11	86	2006
川島孝一郎	総論「在宅療養支援診療所が実現する在宅ケア」	月刊総合ケア	第17巻　第1号	14-19	2007
Satoko Miyatake, Satomi Okahashi, Mikiya Suzuki, Manabu Otomo, Kana Yatabe, Katsuhisa Ogata, Shigeru Fuse and Mitsuru Kawai	The diagnostic duration of amyotrophic lateral sclerosis	V Dubowitz Neuromuscular Disorders	Vol.16 Supplement 1,	S82	2006
Ogawa T, Seki S, Masuda H, Igawa Y, Nishizawa O, Kuno S, Chancellor MB, de Groat WC, Yoshimura N	Dopaminergic mechanisms controlling urethral function in rats.	Neurourology and Urodynamics	25	480-489	2006
Mizuno Y, Abe T, Hasegawa K, Kuno S, Kondo T, Yamamoto M, Nakashima M, Kanazawa I and the STRONG (Study of Ropinirole add-ON therapy in L-dopa treated patients Group)Study Group	Ropinirole is Highly Effective on Motor Function when Used as an Adjunct to L-Dopa in Parkinson's Disease				(in press)

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
Kuno S	Problems in patients with advancing Parkinson's disease.	Parkinsonism & Related Disorders	12	S48-S51	2006
久野貞子、水田英二、北川尚之、後藤啓五、波多野靖子、望月秀樹	Parkinson病に対するtalipexoleからpramipexoleへの切り替え方法の検討	神経治療学	23(2)	157-163	2006
久野貞子,大江田知子	パーキンソン病における認知障害	老年精神医学雑誌	17(4)	430-433	2006
久野貞子	パーキンソン病治療ガイドライン	日本医師会雑誌	135(1)	47-50	2006
久野貞子	臨床症候・診断基準, 特集「パーキンソン病 Up Date」	Pharma Medica	24(9)	978-980	2006
久野貞子	多系統萎縮症－update　多系統萎縮症とは,線条体黒質変性症	CLINICAL NEUROSCIENCE 月刊臨床神経科学	24(9)	978-980	2006
久野貞子	パーキンソン病の薬物治療	Pharma Medica	24(10)	129-132	2006
久野貞子	パーキンソン病とうつ　1.パーキンソン病の精神症状	Depression Frontier	4(2)	8-11	2006
熊本俊秀	神経・筋サルコイドーシスの診断	神経治療	23(2)	107-113	2006
Kimura A, Ueyama H, Kimura N, Fujimoto S, Kumamoto T	Progressive multifocal leukoencephalopathy in an HTLV-I carrier.	Clin Neurol Neurosurg	108(8)	768-771	2006
Miyazaki E, Ando M, Muramatsu T, Fukami T, Matsuno O, Nureki SI, Ueno T, Tsuda T, Kumamoto T	Early assessment of rapidly progressive interstitial pneumonia associated with amyopathic dermatomyositis.	Clin Rheumatol	20	1-4	2005
Sumino Y, Sato F, Kumamoto T, Mimata H	Striated muscle fiber compositions of human male urethral rhabdosphincter and levator ani.	J Urol	175(4)	1417-1421	2006
軸丸美香、増田曜章、上山秀嗣、三宮邦裕、熊本俊秀	垂直性共同視麻痺を呈した両側延髄内側梗塞の1例	臨床神経学	46(1)	45-49	2006
作田　学、熊本俊秀、飯塚高浩、西山和利、折津　愈	神経サルコイドーシスの診断基準案	臨床神経	45	837－840	2005
加隈香苗、荒川竜樹、大林光念、上山秀嗣、熊本俊秀	心原性脳塞栓症のheparin療法中に多発血栓症をきたし、argatrobanが奏効したヘパリン起因性血小板減少症の1例	神経治療	23	509-514	2006
Matsuno O, Miyazaki E, Nureki S, Ueno T, Ando M, Ito K, Kumamoto T, Higuchi Y.	Elevated Soluble ADAM8 in Bronchoalveolar Lavage Fluid in Patients with Eosinophilic Pneumonia.	Int Arch Allergy Immunol	142(4)	285-290	2006
Ando M, Miyazaki E, Hiroshige S, Ashihara Y, Okubo T, Ueo M, Fukami T, Sugisaki K, Tsuda T, Ohishi K, Yoshitake S, Noguchi T, Kumamoto T	Virus associated hemophagocytic syndrome accompanied by acute respiratory failure caused by influenza A (H3N2).	Intern Med	45(20)	1183-1186	2006
Matsuno O, Miyazaki E, Takenaka R, Ando M, Ito T, Sawabe T, Shigenaga T, Ito K, Sugisaki K, Kumamoto T	Links between bronchial asthma and allergic rhinitis in the Oita Prefecture,Japan.	J Asthma	43(2)	165-167	2006
大久保史子、安東　優、葦原義典、大久保俊之、西武孝浩、伊東猛雄、松野　治、深見徹二朗、宮崎英士、熊本俊秀	ベプリジルが原因と考えられた薬剤性間質性肺炎の1例	日本呼吸器学会雑誌	44(1)	17-21	2006
Matsuno O, Miyazaki E, Nureki S, Ueno T, Kumamoto T, Higuchi Y	Role of ADAM8 in experimental asthma.	Immunol Lett	102(1)	67-73	2006

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
小野恵美子、松野 治、広重滋夫、竹中隆一、伊東猛雄、濡木真一、上野拓也、安東優、宮崎英士、熊本俊秀	気管支肺胞洗浄後に急性多発関節炎を発症したサルコイドーシスの1例	日本呼吸器学会雑誌	43(12)	766-770	2005
平島詳典、喜多嶋和晃、杉さおり、香川浩一、熊本俊秀、村上和成、藤岡利生、野口剛	Paclitaxel投与により腹膜播種によるイレウスと多発肝転移に奏効のみられたAFP産生胃癌の1例	癌と化学療法	33(4)	517-519	2006
Kamitani T, Kuroiwa Y, Susuki K, Kishida H, Miyazaki Y, Yuki N	Rhinolalia after diarrhea: a sole motor symptom occurring in post-infectious neuropathy associated with anti-ganglioside antibodies.	Eur J Neurol	13	203-204	2006
Shimamura M, Shimizu.M, Yagami.T, Funabashi.T, Kimura.F, Kuroiwa.Y, Misu.Y, Goshima.Y	L-3,4-Dihydroxphenylalanine-induced c-Fos expression in the CNS under inhibition of central aromatic L-amino acid decarboxylase	Neuropharmacology	50	909-916	2006
Momoo T, Johkura K, Kuroiwa Y	Spike-wave stupor in a patient with metabolic disorder.	J Clin Neurosci	13	301-303	2006
木村活生、野宮 環、遠藤雅直、岩橋幸子、島村めぐみ、鈴木ゆめ、黒岩義之、高橋竜哉	抗痙攣薬の超大量投与を必要とし脳波上前頭部間欠律動性δ活動(FIRDA)を認めた原因不明の痙攣重責の1例.	神経治療	23(3)	286	2006
中江啓晴、児矢野 繁、岸田日帯、波木井靖人、西山毅彦、馬場泰尚、戸田宏幸、鈴木ゆめ、黒岩義之	Distigmine bromide治療により改善したMELASに伴う慢性偽性腸閉塞	神経治療	23(3)	313	2006
西山毅彦、馬場泰尚、遠藤雅直、黒岩義之	FosfluconazoleとFlucytosineを併用して奉効したクリプトコッカス髄膜脳炎の1例—Fosfluconazoleの髄液移行について—	神経治療学	23(1)	51-55	2006
黒岩義之	脳とリズム:生理学的考察	日本薬物脳波学会誌	8	9-12	2006
高橋竜哉、新井信隆、小森隆司、吉田幸子、黒岩義之	アルコール性層状皮質硬化症(Morel病)の一剖検例 An autopsy case of alcoholic laminar cortical sclerosis (Morel disease).	The Japanese Society of Neuropathology	26(supple)	149	2006
黒岩義之	検証報道DPCで緊急見直し(中) 脳梗塞のエダラボン治療, 包括算定から出来高算定に移行へ採算割れ治療を是正	Japan Medicine			2006
岸田日帯、黒岩義之	疫学的データ 英国と世界のCJDの実態	Clinical Neuroscience	24(3)	274-278	2006
西山毅彦	針筋電図検査 B.針筋電図検査の臨床応用 d.筋疾患への臨床応用	神経内科	65(4)	145-149	2006
小森哲夫	ALSにおけるNIPPVの意義と実践	神経内科	64	387-394	2006
近藤清彦	ALS患者を支えるネットワーク	脳と神経	58(8)	653-659	2006
H.Toda, T. Kobayakawa, Y. Sankai	A multi-link system control strategy based on biological reaching movement	Advanced Robotics	Vol.20, No.6	661-679	2006
S.Ikeda, H.Kawamoto, K.Kasaoka, Y.Hitomi, Y.Sankai, H.Ohne, S.Haga, and T.Tgakemasa	Muscle type specific response of PGC-1a and oxidative enzymes during voluntary wheel-running in mouse skeletal muscle	Acta Physiologica	Vol. 188 Issue 3-4	217-223	2006
M.Nishida, T.Yamane, O.Maruyama, Y.Sankai and T.Tsusui	Computational fluid dynamic analysis of the flow around the pivot bearing of the centrifugal ventricular assist Device (Effects of design variations of the washout hole, the pivot and the back gap)	JSME International Journal, Series C	Vol.49, No.3	837-851	2006

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
河本浩明, 塚原淳, 山海嘉之	人間の動作特性を考慮したロボットスーツHALによる立ち上がり動作支援に関する研究	第7回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会(SI2006)		345-346	2006
西澤正豊、稲毛啓介	神経難病の診療と社会資源の配分	神経内科	65(6)	539-541	2006
下畑享良、柳川香織、田中恵子、西澤正豊	筋萎縮性側索硬化症の発症年齢と初発症状についての検討	臨床神経学	46(6)	377-380	2006
Takagi M, Ozawa T, Hara K, Naruse S, Ishihara T, Shimbo J, Igarashi S, Tanaka K, Onodera O, Nishizawa M	New HSN2 mutation in Japanese patient with hereditary sensory and autonomic neuropathy type 2.	Neurology	66	1251-1252,	2006
Ishihara T, Ozawa T, Otsuki M, Shimbo J, Tanaka K, Nishizawa M	Atypical micrographia associated with corticostriatal white matter lesions in systemic lupus erythematosus.	J Neurol Neurosurg Psychiatry	77	993-994	2006
Tada M, Shimohata T, Tada M, Oyake M, Igarashi S, Onodera O, Naruse S, Tanaka K, Tsuji S, Nishizawa M	Long-term therapeutic efficacy and safety of low-dose tacrolimus (FK506) for myasthenia gravis.	J Neurol Sci	247	17-20	2006
Sakai K, Piao Y-S, Kikugawa K, Ohara S, Hasegawa M, Takano H, Fukase M, Nishizawa M, Kakita A, Takahashi H	Corticobasal degeneration with focal, massive tau accumulation in the subcortical white matter astrocytes.	Acta Neuropathol	112 (3)	341-348	2006
Shimohata T, Nakayama H, Shinoda H, Tsukada H, Takahashi S, Gejo F, Nishizawa M	Multiple system atrophy with progressive nocturnal hypoxemia: case report with polysomnography and CPAP treatment.	Eur Neurol	56	258-260	2006
Tagawa A, Tan CF, Kikugawa K, Fukase M, Nakano R, Onodera O, Nishizawa M, Takahashi H	Familial amyotrophic lateral sclerosis: a SOD1-unrelated Japanese family of bulbar type with Bunina bodies and ubiquitin-positive skein-like inclusions in lower motor neurons.	Acta Neuropathol (Berl).			2006 Oct 12, on line.
Shimohata T, Sano H, Takado Y, Tada M, Tanaka K, Nishizawa M	Patient with adult-onset congenital neuromuscular disease with uniform type 1 fibers.	Eur J Neurol	13	e10-e11	2006
Hirose M, Ikeuchi T, Hayashi S, Terajima K, Endo K, Hayashi T, Kakita A, Kimura T, Takahashi H, Nishizawa M	A possible variant of neuro-Behcet disease presenting chronic progressive ataxia without mucocutaneo-ocular symptoms.	Rheumatol Int	27	61-65	2006
信国圭吾	NPPVを使用している神経筋疾患患者における呼吸器感染症対策	難病と在宅ケア	Vol.12, No.10	43-46	2007
福永秀敏	したたかに なおしなやかに さわやかに	難病と在宅ケア	12	47-50	2006
丸田恭子、福永秀敏	筋萎縮性側索硬化症患者の在宅療養における機器の工夫	J.Clinical Rehabilitation	16	202-205	2007
水島 洋	疾病ゲノムとバイオインフォマティクス	生体医工学	Vol.44 No.3	416-421	2006
Ichikawa H, Tanabe K, Mizushima H, Hayashi Y, Mizutani S, Ishii E, Hongo T, Kikuchi A, Satake M.	Common gene expression signatures in t(8;21)- and inv(16)-acute myeloid leukaemia.	Br J Haematol.	135(3)	336-347	2006

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
Okada I, Mizushima H, Ohnishi T, Nagata H, Tanaka H.	Virtual reality system using haptic device and naked eye 3D display, for molecular modeling. And Education.	Proceedings of the Intelligent Systems for Molecular Biology 2006			2006
美原淑子、高畑君子、栗原真弓、高橋陽子、永島隆秀、冨田 裕、高尾昌樹、美原 盤	音楽療法によりQuality of Lifeが向上した筋萎縮性側索硬化症患者の1例	日本音楽療法学会誌	6巻1号	33-40	2006
美原 盤、美原淑子、藤本幹雄、永島隆秀、冨田 裕、高尾昌樹	筋萎縮性側索硬化症に対する音楽療法-神経心理学的検査と生理学的側面からの検討-	日本音楽療法学会誌	6巻1号	23-32	2006
美原 盤、内田智久、高橋陽子	平成18年度診療報酬改定における特殊疾患療養病棟廃止の問題点-神経難病患者に対する医療感情の危機-	神経内科	Vol.65No.3	309-315	2006
宮坂道夫	医療，規範，物語 — 医療倫理学の方法論をめぐって —	法社会学	64	116-129	2006
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン 連載第13回 発症リスクを予測する	ナース専科	第26巻4号	66-69	2006年4月1日
山内豊明	神経難病患者の訪問看護におけるフィジカルアセスメントについて	2005年度難病セミナー 神経難病における在宅看護ケア研修会報告書		21-24	2006年5月
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン 連載第14回 採血後の意識消失	ナース専科	第26巻5号	70-73	2006年5月1日
山内豊明	静脈確保時に患者の手を温めることは有効か？	Nursing Today	第21巻7号	29	2006年6月1日
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン 連載第15回 外来待合室での意識消失	ナース専科	第26巻6号	70-73	2006年6月1日
岡本裕賀理、山内豊明	看護必要度における効果的な評価者養成方法についての検討	日本医療マネジメント学会雑誌	第7巻1号	165	2006年6月16日
堀田将士、山内豊明	看護師とリハビリテーション専門職における看護師業務内容の理解	日本医療マネジメント学会雑誌	第7巻1号	194	2006年6月16日
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン連載第16回 PTCA後の急変	ナース専科	第26巻7号	70-73	2006年7月1日
丸住聡子、山内豊明	看護臨床の場でのフィジカルアセスメントについて	医学教育	第37巻補冊	63	2006年7月29日
篠崎恵美子、山内豊明	看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育のミニマム・エッセンシャルズ～呼吸に焦点をあてて～	医学教育	第37巻補冊	63-64	2006年7月29日
佐々木詩子、山内豊明	客観的指標を利用しての実践の知の検証—長期臥床患者における起立性低血圧の観察—	医学教育	第37巻補冊	64-65	2006年7月29日
山内豊明	看護教育の動向	医学教育別冊 医学教育白書2006年版('02～'06)		174-179	2006年7月31日
千本美紀、山内豊明	立位でのグリセリン浣腸は安全か？	Nursing Today	第21巻9号	15	2006年8月1日
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン連載第17回 骨折患者さんの急な嘔吐	ナース専科	第26巻8号	74-77	2006年8月1日
山内豊明	管理者が知っておくべき看護必要度の正しい理解と運用ポイント	ナースマネージャー	第8巻5号	6-15	2006年8月1日
松野早苗、山内豊明	看護師の勤務年数とクリティカルシンキング	第10回看護管理学会年次大会講演抄録集		67	2006年8月25日
嶋森好子、田中彰子、山内豊明	看護職員の労務管理に関する実態調査－DPC導入による看護管理上の変化についての質問紙調査－	第10回看護管理学会年次大会講演抄録集		125	2006年8月25日
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン連載第18回 腹痛を訴える高齢患者さん	ナース専科	第26巻9号	82-85	2006年9月1日
山内豊明	なぜ看護必要度を使う必要があるのか アセスメントの視点から	看護管理	第16巻9号	719-727	2006年9月10日
山内豊明	腕のポジションによって血圧値に違いはあるか？	Nursing Today	第21巻12号	16	2006年10月1日
山内豊明	静脈確保時に患者の手を温めることは有効か？	Nursing Today	第21巻12号	17	2006年10月1日

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
山内豊明	無症候性心筋梗塞はどの程度存在するか？	Nursing Today	第21巻12号	18	2006年10月1日
千本美紀、山内豊明	立位でのグリセリン浣腸は安全か？	Nursing Today	第21巻12号	57	2006年10月1日
山内豊明	フィジカル・アセスメント 基礎レッスン 最終回 胸痛を訴える肺がんの患者さん	ナース専科	第26巻10号	74-77	2006年10月1日
山内豊明	はじめに	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	4-5	2006年10月10日
山内豊明	第1章（総論）在宅におけるフィジカルアセスメント 1 フィジカルアセスメントとは何か	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	7-11	2006年10月10日
山内豊明	第1章（総論）在宅におけるフィジカルアセスメント 2 訪問看護におけるフィジカルアセスメントの意義	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	12-13	2006年10月10日
山内豊明	第1章（総論）在宅におけるフィジカルアセスメント 3フィジカルアセスメント各技法のポイント	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	14-20	2006年10月10日
松澤京子、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 1 熱が出た	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	22-31	2006年10月10日
勝川けさ代、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 2 意識がない	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	32-41	2006年10月10日
三浦真理、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 3 胸が痛い	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	42-51	2006年10月10日
大澤智恵子、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 4 息が苦しい	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	52-65	2006年10月10日
池田幸恵、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 5 むくみがある	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	66-75	2006年10月10日
原田典子、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 6活気がない	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	76-85	2006年10月10日
松澤京子、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 7 足の先が冷たい	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	86-94	2006年10月10日
大澤智恵子、山内豊明	第2章（ケースカンファレンス）利用者・家族の訴えからのアセスメント 8 だるい	コミュニティケア臨時増刊号 事例から学ぶ訪問看護におけるフィジカルアセスメント	第8巻12号	95-103	2006年10月10日
篠崎恵美子、山内豊明	看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の現状	看護教育	第47巻9号	810-813	2006年10月25日
山内豊明	フィジカルアセスメント テクニック編 呼吸音-4つの異常音を聴き分ける	ナース専科	第26巻11号	86-89	2006年11月1日
髙田真澄、髙田宗樹、宮尾克、山内豊明	高齢者の血圧測定に必要とされる安静時間の妥当性についての実証的研究	第21回生体・生理工学シンポジウム論文集		509-512	2006年11月17日
山内豊明	フィジカルアセスメント テクニック編 連載2 呼吸音-聴き分けた音の意味	ナース専科	第26巻12号	78-81	2006年12月1日
山内豊明	フィジカルアセスメント テクニック編 連載3 呼吸音-正常と言いきるための条件	ナース専科	第27巻1号	82-85	2007年1月1日

平成18年度　研究成果の刊行に関する一覧表

〔雑誌〕

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
H Yoshino, A Kimura	Investigation of the therapeutic effects of edaravone, a free radical scavenger, on amyotrophic lateral sclerosis (Phase II study).	Amyotroph Lateral Scler	7巻	241-245	2006
秋山真弓、古賀道明、吉野英、浜岡章、野口保彦、平田幸一、結城伸泰	抗ガングリオシド抗体検出キットの開発 Guillain-Barre症候群、Fisher症候群における臨床的有用性の検討	脳と神経	58巻6号	477-481	2006
藤田美江、森谷栄子、ｼｪｻﾞｰﾄﾞ樽塚まち子	医療依存度の高い療養者の受け入れに関するﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽ側の実態調査	日本難病看護学会誌	11巻1号	108	2006

Ⅳ. 研究成果の刊行物・別刷り

神経内科，65(6)：542-548, 2006

特集 神経内科の医療・介護—現状と課題—

在宅神経難病患者のQOL*

伊藤博明**／中島　孝**

Key Words：palliative care, palliation, SEIQoL(The Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life), multidisciplinary and inter-disciplinary care, relational approach

はじめに

世界的に広まっているEBM(Evidence-Based Medicine)中心の医療，すなわち現代医療の下では，「病気を治すこと」と「治せないにしてもアウトカムを有意に改善すること」が医師の仕事とされている．日本ではこれに対抗するケア原理が十分に理論化されていないため，これが現代医療の唯一の使命のように思われすぎている感がある．

神経難病領域は治る過程がなく進行性であるため，このEBM重視の考え方からは医療の役割や難病医療の重要性は理解されにくい．難病には根治療法がなく，アウトカム評価が容易でないためにEBMは依然として乏しいが，1972年以降，わが国では研究事業として難病医療が発展し，アウトカムとしての難病患者のQOL(Quality of Life：生活の質)をどのように評価し改善するのかが継続的な研究課題とされてきた．その中で，根治できず慢性的な経過と身体障害が進行する難病では，診断した時点からできる限りよいQOLを目指してケアをおこなう必要があるという特徴が明らかにされた．実は，この考え方自体が英国で生まれ，世界的に発展してきた緩和ケア(palliative care)概念[1]と共通性があることがようやくわかった．たとえば，神経難病ケアで行われる栄養療法としての胃瘻造設術(Percutaneous Endoscopic Gastrostomy：PEG)や人工呼吸器による呼吸ケア[2]もオピオイド治療もすべて緩和ケアにおける個別の緩和療法(palliation)と捉えることができるからである．

本稿ではまず，緩和ケア概念は根治療法のない状態で生きる人間の生を支える原理であることを再度認識する．次に，本来の緩和ケアは入院ではなく在宅療養を目標とするケア概念であることを理解すると同時に，わが国でおこなわれてきた難病ケアと比較する．本稿を難病ケア概念を再構築する一助としていただければ幸いである．

緩和ケアモデルとはなにか？
—誤解を解くために—

本来の緩和ケアは「がん」に限定したものでも入院に限定したものでもない．しかし，わが国では緩和ケアが診療報酬体系に導入された際に，がんとAIDSの終末期に行われる入院の包括診療としてまとめられた．このため，緩和ケア概念の中核にあったリハビリテーションスタッフや栄養療法スタッフなどを含めた多専門職種ケア(multidisciplinary and inter-disciplinary care)によりおこなうトータルペインコントロールという概念は希薄となり，結果として，生活の積極

* QOL in the patients with neurological intractable diseases at home.

** Hiroaki ITO, M.D. & Takashi NAKAJIMA, M.D., Ph.D.: 国立病院機構新潟病院神経内科〔〒945-8585 新潟県柏崎市赤坂町3-52〕; Department of Neurology, Niigata National Hospital Organization, Kashiwazaki, Niigata 945-8585, Japan.